

---

# たで喰うムシもすきずき

ジハイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たで喰うムシもすぎずき

### 【コード】

N9892V

### 【作者名】

ジヘイ

### 【あらすじ】

マニアン侯爵家次女 アリシア・カルタヘナ・マニアン、側室候補として、第三王子殿下の学友となりました、ついさっき。

眼福、眼福。

あ、よだれが……。

え、ちよ、その凶器は、何に使うおつもりですか？

目指せ、ラブコメ！

つらぬけ、王道（作者の自己満足的な）！

あきらめずに、かきあげろ（作者がへタレですみません）！

## 1 プロローグ

おお~~~~~!!!

来た~~~~~!!!

内心で激しく喜びの雄たけびを上げている私を余所に、正式な手順が踏まれ、納まるべき所へと納まっていく。

マニアン侯爵家次女 アリシア・カルタヘナ・マニアン、側室候補として、殿下の学友となりました、ついさっき。

本当、至福の時間だったわ。

いや、殿下との初顔合わせ的な、ね。

もう、生殿下ですわよ、生殿下!

いやあん、どうでしょう、ほんと。

おかわいらしくて、ほんと、ヨダレがでそう。

おおっと危ない。

## 2 生は最高！

「殿下、ご機嫌麗しゅう。アリシア・カルタヘナ・マニアンと申します。以後よしなに。」

節目がちに、楚々として。

でも、だめ、やっぱりどうしてもチラチラと目が行ってしまっ！  
て、あ、めちゃくちや嫌そうな目で視線逸らされた……。  
え、視線に気付かれちゃったとか！？  
どうでしょう……。。

「余は疲れた。もう下がってよい。」

き、気付かれていませんわよね？

どうにか表面上は取り繕ってその場を辞した。

あてがわれた部屋で、少しだけ気をゆるめた。

ああ、心の内から言葉遣いに気をつけないといけないかしら？

でも、はあ、もう、眼福よ、眼福

何、あの麗しさ、おかわいらしさ！

思い出すだけで、もう食が進みそ、まっ、コホン、いやだわあ、私  
ったら。

柔らかかそうな艶やかな黒髪、まるで天使のような美しいお顔にはトパーズのような褐色の目、すべすべのお肌。  
同い年の16歳だというのに、私の肩より少し高いだけの身長に華奢なお体。

そう、殿下は10歳のお姿のまま、成長が止まっている。

何を隠そう、わが国の宝とも言つべき第三王子殿下は、呪いつき。

そして、幸運にも、私は美少年愛好家！

全くもって、ツイてる、じゃなかったですわ、ツイていますわ！  
ちよっと待って、美少年をはべらして、あ〜んなことやこ〜んなこととかしてないですわよ〜。

いえ、ねえ、適齢期なのに、こんな趣味（性癖ではない！）なのを憂いた両親&姉弟たちの苦肉の策が今回の側室計画だったわけ、ですの・・・。

でも、変態じゃな、くてよ！

私は、ほんと、眼福を得られるだけで幸せなんです、もの！

えと、まあ、ねえ、妄想が暴走することたまにはあるけれど、私の頭の中を知られなければ、誰にも迷惑をかけないわけだしねえ。

それに、第三王子殿下には、確実にお世継ぎが求められているわけでもな、ありませんし。

側室になれたら、あんな眼福を毎日得られるという幸福な日々を送れるだろうけれど、そこまでの野心なんかありませんしねえ。

### 3 状況説明？ いえいえ、自己紹介的な何かですよ。

あてがわれた部屋で、少しだけ気をゆるめた。

ああ、心の内から言葉遣いに気をつけないといけないかしら？

うん、無理。

でも、はあ、もう、眼福よ、眼福。

何、あの麗しさ、おかわいらしさ！

思い出すだけで、もう食が進みそ、まっ、コホン、いやだわあ、私  
ったら。

柔らかそうできて、艶やかな黒髪、まるで天使のような美しいお顔  
にはトパーズのような褐色の目、すべすべのお肌。

同い年の16歳だというのに、私の肩より少し高いだけの身長に華  
奢なお体。

そう、殿下は10歳のお姿のまま、成長が止まっている。

何を隠そう、わが国の宝とも言つべき第三王子殿下は、呪いつき。

そして、幸運にも、私は美少年愛好家！

全くもって、ツイてるわ！

ちょっと待って、美少年をはべらして、あんなことやこおんな  
こととかしてないから、ひかないで！

早い話が、適齢期なのに、こんな趣味（性癖ではない！ここ、重要  
！）なのを憂いた両親&姉弟たちの苦肉の策が今回の側室計画だっ  
たわけで……。

ほんと、眼福を得られるだけで幸せ〜！

えと、まあ、ねえ、妄想が暴走することたまにはあるけど、私の頭の中を知られなければ、誰にも迷惑をかけないわけだしねえ。

それに、第三王子の殿下には、確実にお世継ぎが求められているわけでもないし、っていうか、無理だし。

側室になれたら、あんな眼福を毎日得られるという幸福な日々を送れるだろうけれど、そこまでの野心なんかないわあ。

絶対、お父様が心労で倒れるわ、うん。

「アリシア様、ちょっと聞いてらっしゃいますか!」

「え？ 何かしら？ エリー?」

「まあ、また、妄想してやがりましたわね、お嬢様……。」

「ええっと、エリーさん、淑女がそのような言葉を発しては

「人の苦勞も知らないで、全く何をお考えになってらっしゃるんだか! そりゃあ、言葉も悪くなりましようとも!」

「うっ。」「ごめんなさい。」

「ま、良いですわ。それよりも講義では節度を持って行動なさって下さいね!」

「え、ええ! わかって、いえ、無論そのつもりですわ。」

「でないと、旦那様へ報告させていただきますからね、い・ろ・い・

る・と。」

「ひいひいっつ。そ、そりゃあ、色々無茶頼んじやったりしてるのは申し訳ないけど、そんなに怒らなくったって。」

恐すぎですよ、エリーさん。

私と似たような容姿してたって、あなたの方が目鼻立ちの整った美人さんなんですから、断然恐いんですよ！

「はあ、もう少しご自覚いただければ、私の心労も減るのですが・・。ともかく、アリシア様がしつかりして下されば、私は何も申しません！」

「えーつと、エリーさん？そ、そろそろ、侍女モード終わりにしてかないかな？」

休戦を申し込みつつ、お茶になだれこませた。

「ふうっ、きょうも紅茶がおいしっ！」

「また、そんな古いネタを。」

「いいじゃない、これくらい。負け狼組の方が萌えるけどね！」

「あなた、あの商家に消されるわよ、こんなネタやってると。」

「てへっ。」

「まあ、いいわ。それで、明日からの予定、ちゃんと把握してるの？」

「にらまないですよ。美人さんだと迫力が、い、いえ、はい、真面目にやりまーす！」

「えーっと、明日は殿下と歴史の講義をご一緒に受ける、で、その後は、礼節を側室候補の方々と一緒にお勉強。で、殿下や姫君とたまにお茶やお食事をしつつ、適度に人間関係を作れと。」

「・・・アリシア、そこで間違っても側室になれるように頑張ると言わないのは、空気を読んでるの？いえ、面倒くさいだけよね。」

「もちろん、空気読んでるに決まってるじゃない。堅実にいかないと！小さなことからコツコツとよ！私の『老若男女の美人さんに世話を焼かれながら過ごす優雅な老後計画』の為に！」

「・・・殴るわよ。」

「たんこぶできた〜！！！！普通殴る前にいうセリフじゃないの？」

「何？次の予告って事にしてもいいのよ。」

「申し訳ございませんでした。」

上から目線で見下ろされても、美人さんなら大丈夫！

「は、いかんいかん、新たな境地に至ってしまう所だった。」

「何か言った？」

「いえいえ、何でもございませんですよ、ハイ！さあ〜って、明日の予習でもして、早く寝ようかなあ〜っと。」

#### 4 早起きは、ふつう得しますよね？

「はあ、早く寝過ぎて、夜明け前に目が覚めるって、どうなのよ．．．」

「健康でよろしいんじゃないですか？まあ、城内の方々が仕事を開始した直後でしょうから、流石に身動きを取れませんが。」

「ですよねえ〜。って、事でエリーさんや、ものは相談なんですが。」

ニツコリ、笑顔は大切ですよ。

「はあ、わかりましたよ、用意致しますのでお待ち下さい。」

「ありがとうございます！」

ギロリ。

はあ。

「む、無言の圧力が！？う、うう、そ、その代わり、あの子のお迎えと今晚の添い寝権を！」

「っ！わ、わかりましたわ。」

ちょっと、顔と動きが違っ！

かるうじて、真面目な表情だけどさあ！

「ううっ、勝ったはずなのに、負けた気がする．．．。」

はい、右見て〜、左見て〜  
だっれもいませんねえ〜

さあ、お庭にでも行って見ようかなあ？

確か、あっちの方に東屋があつたよつな。

・・・庭も広いわ！  
ちよつと、迷うつて！  
か、帰れるかな？

・・・あー、やっとたどり着いた。

うん、やっぱりいい雰囲気だわ！

「すう〜すう〜つ、はあ〜〜〜。ああ〜、  
気持ちいい朝だわ〜。」

あら？

あんな所に、赤い花？

あれは

「あなたは誰かしら？」

ビクッ！

後ろから聞こえた声に、体が強張った。

「ねえ、そのあなた。ここがどこだかわかっていてっ、ゆっくりと振り向いて、所属と名を名乗りなさい。」

やっぱあゝ。

ここって、もしかして王族の方々の……。

ゆっくりと顔を伏せ、礼を取りながら、振り向く。

「申し訳ございませんっ！」

覚悟を決めて、面をあげた。

真っ赤。

真っ赤な、長い豊かな髪。

燃えるような輝きを放つ褐色の目、すらりとした肢体を黒いドレスで包んだ美女。

少し離れた距離さえ飛び越える迫力。

「……ラディエイタ」

「あなたの名、ではなさそうね。」

「あつ、も、申し訳ございません。」

「名を、名乗りなさい。」

「あ、アリシアと申します。申し訳ございません」

「家名は？と聞くのは野暮ね？アリシア、いいえ、アリスちゃん。」

「え？」

「いくら特徴が似ているといっても、見る人が見ればわかるもの。例え、多少、フフツ、奇抜な服装をしていてもね。」

「バ、バレてる？」

「え、かなりのピンチ??」

「なあゝんてね。」

「は？」

「ひっかかった？いやあゝん、何て素直な子！」

「え？」

「だって、私、部外者なのよねゝ。それに、立ち入り制限なんて元からかかってないし、ここ。」

「!?!?・・・じゃ、じゃあ、え、でも、さつき。」

「そんなわかりやすく混乱してくれるなんて、かわいいわあゝ。」

「あ、あのお・・・ど、どちらさままで？」

「ラディエイタ」

「え、それは」

「フフツ、その花に見立ててくれるなんて、粋だね。気に入った。」

ゾクツ。

ちよつと、美女様の目が肉食獣に！

いやあゝな、予感が・・・。

「また、次に会えるのを楽しみにしてるわ。」

「え、それは、どういう

ブワアサアツ

「わっ！」

一瞬の突風に目閉じて、とっさに上げた手で顔を庇った。

再び目を開けた時には、誰もいなくなっていた。

ラディエイタの花を除いて。

## 5 王宮の料理つまー

はっ！

私、普通に名乗っちゃったよ！

頭悪すぎだろうよ、何やってんだよ！

とか気づいたのは、朝食の最中でした・・・。

けど、あの場合エリーに罪着せちゃう事になるんだから、まあ、間違っただけなのかな。

まて、なぜ偽名という手を思いつかない！？、と悶々としながらも、食事に集中。

つまつま。

ああ、表情だらけてるんだろうなあ、でも、まあいいやあ。

さすが、王宮、レベル高っ！

いくらでもいけそう！

ただ、朝食にはちよっと品数多いけど・・・。

朝から、肉はどうよ。

いや、おいしくいただいたけどさ。

出されたものはきちんと食べる主義ですから！

お残しは許しまへんでえ！！

と、しつけられてるからね、お隣のエリー様親子の無言の圧力で・・・。

笑ってない笑顔って最恐だと思います。

それはおいといて。

謎の美女現る!?

ですよ、奥さん。

見出しっぽく言ってみただけど、全くわかんないわ。

うーん、誰?というか、何だったんだろう?

お供を連れてなかったということは、貴族ではない?

でも、あの気品はどう説明すれば?

王族レベルでしたよ、カリスマ性といい・・・。

いきなり現れて、いきなり消えるとか。

エリーに相談、いや、絶対怒られるから嫌だ!

うん、謎は謎のままです!!

「アリシア様、いつまで唸ってらっしゃるんですか?そろそろお支度を。」

「あ、はいはい。」

「返事は一度で結構ですよ。」

「は、はい。」

## 6 とりあえず、主要人物の紹介もかねてみようか

講義は、城内の一室、我が家の貴賓室のような場所で行われたわけだ。

贅沢に空間を使用して配置されたイスは、ゆつたりとしたベロアのもの、特製の小さな机は手触りも細工も一級品、その右隣りには大理石の小さな机というか本とかの置き場？、逆側には繊細なガラスのグラスやら飲み物が鎮座していた。

うっわ。

うっわ。

うん、ひくくらい豪華。

殿下もご一緒ですもんね、わかります。

そして、男女比はプチハレム状態。

他ではお目にかかれない光景だわ。

ちなみに、配置としては、殿下のお席が一番先生方に近い位置、その後方に公爵家のセリーヌ様を中心として、左右に侯爵家のカトリーナ様、私、その他大勢的なノリで後ろに扇状？でした。

まあ、人数少ないからそんなに説明する程のもんじゃないか。

そうそう、セリーヌ様は艶やかな黒髪をきちつと結び上げたスレンダー美人様です。知的な緑色の目が美しい、まさに淑女なお方で殿下のいとこ様でらっしゃいます。

カトリーナ様は赤味かかったこげ茶色の髪をいつも華やかに結って

らっしやるお洒落美人様です。ぼんきゅぼん、色香に惑わされそうです。  
非常に美形なお二人の後光が輝かしすぎて、他の方々がかす、ゴホゴホ、いえ、私の頭が残念過ぎるので、他の方々を覚えられなかっただけです、はい。

気をとりなおして、講義は、っと。

あゝ、先生方と殿下のやり取りの下、進められるっつと。  
いや、ねえ、殿下の頭の良さに脱帽なんですけれど、やっぱり、女子には発言権も質問権もないわけですね、了解。

ちよーっと、この辺り気になったんですけど、ダメですよねえ。

あれ？

ああ、聡明と名高いセリーヌ様もご質問なさりたいんじゃない？

あーっと、カトリーナ様はちよっと飽きてきてらっしやいます？

うーん、大変。

というか、せつかくの機会なのに、何、この置物にぎやかし要員な扱い。

殿下、本当に、徹底して眼中にないんですね、私たち。

とりあえず、両親にお伺いを立ててみた。

質問したいんだけど、していい？

-ダメ。女子はでしゃばるな。

だって、せつかくの機会なのにもつたいないじゃない。

じゃ、家庭教師か本おくれ。

- それもダメ。抜け駆けしようと思われたくないもん。

もんって……。じゃあ、娘がストレスで倒れてもいいの？

- なら、帰ってきなさい。

う、それはちょっと。(せっかくの眼福が。)

- 我慢なさい。

皆さんと一緒に抜け駆けじゃないよね？

- お前はまた何をやらかす気だ！

大丈夫、何とかありますわよ、お父様。オホホホホッ。

という、手紙のやりとりをしてたら、季節の変わり目になってしまった。

よく耐えたわ、私。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9892v/>

---

たで喰うムシもすきずき

2011年10月1日09時39分発行